

長

軍務局

法務局

人事局

海軍

佐鎮機密第〇號

大正八年五月三十一日

佐世保鎮守府司令長官 財部

大加藤友三郎殿

軍艦最上損傷事件査問終結ノ件

軍艦最上損傷事件査問ニ附シ候處別紙査定書ノ通査問委員長ヨリ報告

右ハ適當ノ決定出シメ責任者ニ對シテハ情狀ヲ酌量シテ誠告處分

ニ附シ候條査問會規則第十九條ニ依リ

右報告ス

追テ小島ヲ襲撃シ船艦繫留場ニ繫留スルニ方リテハ繫留場入口ヨリ吹

來ル南風ヲ眞向ニ受クルカ如キ位置ハ此ル殊究ヲ要スルモノト認メ

調査研究ヲ進ムル方針ニ候條併セテ申添候

査定書誠告書寫各一通添

海軍 (終)

0006

軍務局受 3.6.5

子

二〇〇三

大正八年四月三十日

佐世保鎮守府司令長官 財部 彪

海軍大臣 加藤 及三郎 殿

長官印

軍務局

第一課
第二課

軍艦最上損傷ノ件

軍艦最上負傷ノ件別紙ノ通最上艦長

ヨリ報告書有之候ニ付査問會ヲ組織ニ調

査為致度候

右報告ス

(別紙ニ添)

第一課長

局員

藤田

栗

峯

橋本

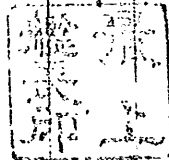
海軍

0007

軍務局

大正八年四月二十三日於佐世保

最上艦長豊島一



佐世保鎮守府司令長官財部彪殿

軍艦最上損傷件

本艦が繫船場北側ニ其左舷ヲ横付繫留セシ際
 大正八年四月二十日正午過南方ノ風アリ天候険悪ノ
 兆ヲ呈シ今一時頃雨ヲ加ハリ風威漸次強烈ナリト
 シ今一時四十五分艦ハ直角ニ受クル風壓ト波浪ノ多
 屢岩壁ニ壓着セラルヲ以テ即時総員ヲ起シ工廠供
 用ノ筏ノ地ニ本艦備付竹製防衝具三俣ヲ岩壁ニ懸
 吊シ尚集束セシ釣床等ヲ舷外ニ用意シ極力觸壁
 防止作業ニ従事セシメタリ約ニ時間艦ハ間歇的ノ強

海

軍

0008

風ニ壓セラレト共ニ三角波浪ニ掀翻セラレ其都度
 防衛用ノ銃ハ艦ノ外敵ヲ衝擊シ終ニ水準線附
 近ニ長約百呎幅約二呎凹陥部最深約半吋ノ屈
 曲帶ヲ生スルニ至レリ高内都ノ被害ハ別圖記
 載ノ如ク梁材一部ヲ屈曲セルタメ其ノ接目或ハ
 銃等ヨリ莫測ノ外左舷番兵塔臺受金及左
 舷後部下甲板舷窓ノ雨水受金三何破損セリ
 右不取敢報告ス

(別圖一葉添)

0009

別圖

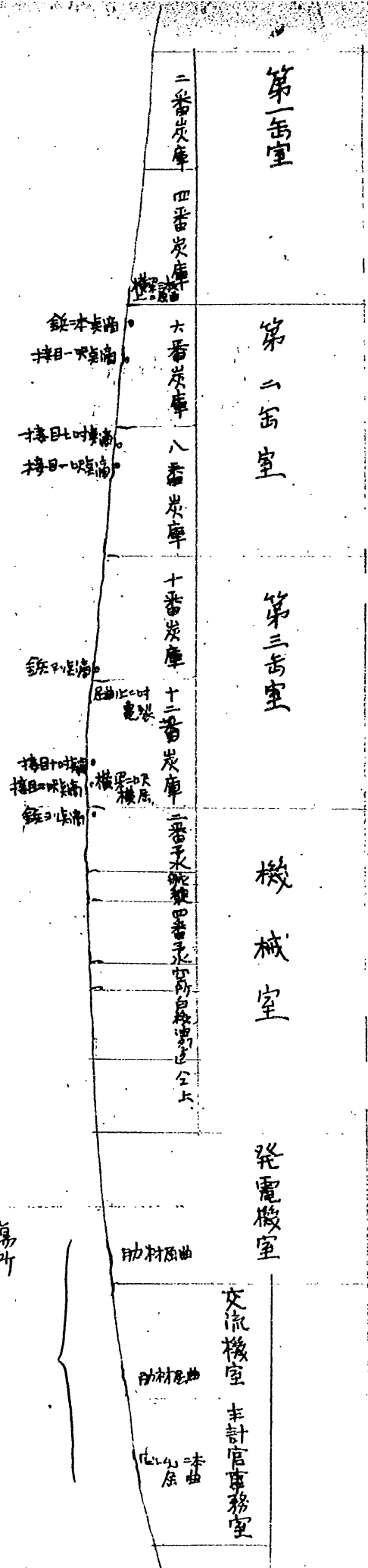
軍艦最上九舷側船体変形略図

場所 載荷吃水線より約二呎下

最上変形甚しく却一寸高

外 鉤	長二呎	深	左吋
障 壁	長一呎	全	右
横 梁	長一呎	全	右

場所 載荷吃水線より約呎下



肋材及曲

肋材及曲

味曲

交流機室 主計官事務室



誠告

海軍中佐 豊島二郎

其ノ官ハ軍艦最上艦長トシテ同艦カ佐世保海軍工廠修理艦船繫留場北側ニ左舷ヲ横着ケ繫留中大正八年四月二十二日正子頃ヨリ吹起リタル南風ヲ側面ニ受ケ同一時頃ヨリ強烈ナル風力ニ壓迫セラレタリ當時其ノ官ハ在艦就床シ居リテ艦ノ激動ヲ覺知スルヤ否ヤ起床シ艦内ヲ巡視シタルニ艦ノ艦部稍岸壁ニ接近シ居ルヲ認メ不安ヲ感シタルヲ發以テ直ニ衛兵伍長ヲシテ其ノ旨ヲ港務部ニ急報シテ援助ヲ乞ハシメ且同人ノ警告ニ依リ艦部著シク岸壁ニ接近シテ危険ノ迫ルヲ覺知シタルニ依リ同一時十五分先任將校ニ總員起床ヲ命シ其ノ官自ラ部下ヲ督勵シテ後部ニ使用セシ工廠備供用筏ノ繫留索切斷シ前方ニ移動セルヲ再ヒ後方ニ定繫スルノ手段ヲ執リ一方同艦備付竹製防衝具三個ヲ岸壁ニ懸吊

海軍

0011

シ尙集束セル釣床ヲ舷外ニ用意シテ萬一ニ備ヘ極力觸壁防止作業ニ從
 ヒ慚ク其ノ目的ヲ達スルコトヲ得タリト雖其ノ間約二時間間歇的ノ強
 風ニ吹壓セラレタル艦ハ岸壁トノ間ニ介在スル筏ノ爲ニ外板ニ甚シキ
 衝撃ヲ受ケ遂ニ其ノ水準線ニ於テ前部肋材第六十二番ヨリ後部肋材第百
 四十二番ニ至ル一枚通りハ一帶ニ圓マ肋材ハ所所龜裂シ石炭庫ノ「ス
 テール」ハ殆ト全部屈曲シ隔壁ハ十箇所ニ損傷ヲ受ケ其ノ他「リボット」
 ノ切斷セルモノ等打換ヲ要スルモノ約二千本ニ及ビ之カ復舊ニ入渠費
 ヲ除キテ工費約千六百圓材料費約八百五拾圓附屬費約六百拾貳圓五拾
 錢總計約參千六百貳圓五拾錢ヲ要スル程度ノ損害ヲ生スルニ至ラシメ
 タリ
 按ズルニ同艦ハ曩ニ之ヲ繫留スルニ方リ右舷後部ノ繫留索ハ三時半一
 節ノ錨鎖ニ十五噸ノ沈鐘ヲ附シ錨鎖鎖ヨリ通スル五吋半長百米ノ「ワ
 イヤール」ヲ「テイクル」ニ依リ五十馬力ノ汽船ヲ使用シ艦ト岸壁トノ

間隔ハ滿潮時ニ工廠供用ノ筏ニ個ヲ並列シ得ル程度ニ於テ緊張シ從來
港務部慣行ノ繫留方法ヲ其ノ儘襲踏セシモノニシテ潮汐ノ干滿ニ伴ヒ
「ワイヤト」ニ多少ノ弛ミアルハ免レサル所ナリ而シテ當夜ノ如ク強
烈ナル風壓ヲ舷側ニ受クルニ於テハ「ワイヤト」ノ伸張ニ依リ防舷物
ノ浚去ヲラルル場合ニハ岸壁ニ觸接スル危險ノ生スルコトナシトセサ
ルカ故ニ其ノ官办此點ヲ顧慮シ觸壁防止ニ從事シタルハ其ノ當ヲ得タ
ルモノニシテ是カ爲觸壁ノ災ヲ免レタルモノト認ムルモ艦ノ損傷ノ結
果ヨリ考フルトキハ其ノ損傷ハ甚トシテ岸壁ト艦ノ間ニ介在シタル筏ノ
衝激撃ニ依リテ生シタルモノナレハ其ノ官ニシテ工廠供用筏ノ構造ト
艦ノ外板ノ強度トノ關係ニ思及シ筏ノ爲ニ損傷ヲ生スルノ虞ナキヤラ
顧慮シ直ニ之ヲ調査スレハ其ノ損害ノ狀況ヲ詳カニシテ筏ニ代用スルニ
集束セル釣床ヲ使用スルノ方法等モ講シ得ヘク免ニ角少クトモ損害ノ
程度ヲ減少シ得ル方法ヲ案出シテ之ヲ實行シ得タランニ事茲ニ出テス

艦ノ觸壁防止ニハ成效シ得タリト雖當夜ノ如キ荒天ニ際シテハ艦体トノ關係上防衝用トシテ信賴スヘカラサル工^固廠供用ノ後ヲ信賴シ過キタルハ塞^年遺憾トスル所ニシテ多少ノ損傷ハ^固ヨリ免レサリシトスルモ紋上ノ如キ損害ヲ受クルニ至リタルハ畢竟注意ノ周到ナラサリシノ致ス所キ^テ其ノ所爲ハ海軍懲罰令第九條第十號ニ該當スト雖本件カ夜間殊ニ深更ニ於テ急激ニ起リタル^強風ニ基因シ其ノ官カ觸壁防止ニ專心從事シタル爲他ヲ顧ミル邊ナカリシノミナラス其ノ繫留位置ト風向トノ關係等酌量スヘキ情狀アルヲ以テ^{特ニ}懲罰ヲ行ハス將來ヲ誠告ス

大正八年五月三十一日

佐世保鎮守府司令長官 財部 彪

海軍

0014

司令官

佐防機第五九號

法務長

大正八年五月十六日

軍艦最上損傷事件査問委員長海軍大佐森本義寛
佐世保鎮守府司令長官財部彪毅

査定報告ノ件

軍艦最上損傷事件査問終結ニ付査定書及
同副本並一件記録相添
右報告ス

(別紙添)

(終)

五十九號

0015

海軍

海

軍

査定書

軍艦最上損傷事件査問ヲ遂ケ査定スルコト左ノ如シ

第一 事實

修理艦

軍艦最上、佐世保海軍工廠對船塢北側ニ左舷ヲ横着ケ繫留中、大正八年四月二十二日正子頃ヨリ吹起リタル南風ヲ側面ニ受ケ同一時頃ヨリ強烈ナル風力ニ壓迫セラルタリ

當時艦長ハ左舷就床ニ居リテ艦ノ激動ヲ覺知スルヤ否ヤ起床ニ艦内ヲ巡視シタルニ艦ノ艦部稍岸壁ニ接近シ居ルヲ認メ不安ヲ感シタルヲ以テ直ニ衝兵伍長ヲシテ其ノ旨ヲ港務部ニ急報シテ

援助ヲ乞ハシメ且同人ノ警告ニ依リ艦部著ルシ
ク岸壁ニ接近シテ危険ノ迫ルヲ覺知シタルニ依リ
同一時十五分先任將校ニ總員起床ヲ命ジ艦長自
ラ部下ヲ督勵シテ後部ニ使用セシ工廠供用筏ノ
繫留索切断シ前方ニ移動セルヲ再ヒ後方ニ定繫ス
ルノ手段ヲ執リ一方同艦備付竹製防衝具三個ヲ
岸壁ニ懸吊シ尚集束セル釣床ヲ舷外ニ用意シ
テ萬一ニ備ヘ極力觸壁防止作業ニ從ヒ漸ク其ノ
目的ヲ達スルコトヲ得タリト雖其ノ間約二時間
間歇的ノ強風ニ吹壓セラルタル艦ハ岸壁トノ間ニ
介在スル防衝筏ノ為ニ外釘ニ甚シキ衝擊ヲ受ケ
遂ニ其ノ水準線ニ於テ前部肋材第六十二番ヨリ
後部肋材第百四十二番ニ至ル一枚通りハ一帯ニ

0017

凹ミ助材ハ所々亀烈シ石炭庫ノステーハ殆ト全部
屈曲シ隔壁ハ十個所ニ損傷ヲ受ケ其ノ他「リブツト」
ノ切断セルモノ等打換ヲ要スルモノ約二千本ニ及
ヒ之カ復舊ニ入渠費ヲ除キテ工費約千六百圓材
料費約八百五十圓附屬費約六百十二圓五十錢
總計約三千六十二圓五十錢ヲ要スル程度ノ損害
ヲ生スルニ至ランメタリ

第二 原因

同艦ハ曩ニ之ヲ繫留スルニ方リ右舷後部ノ繫留
索ハ二吋半一節ノ錨鎖ニ十五噸ノ鈎錘ヲ附シ該錨
鎖ヨリ通スル五吋半長百米突ノ「ワイヤー」ヲテ
「ク」ニ依リ五十馬力ノ汽船ヲ使用シ艦ト岸壁
トノ間隔ハ満潮時ニ工廠供用ノ筏二個ヲ並列シ

0018

得ル程度に於テ緊張シ從來港務部慣行ノ繫留方
法ヲ其ノ儘襲踏セシモノニシテ「ワイヤー」ニ多
少ノ弛ミアルハ免レサル處ナリトス而シテ當夜
ノ如ク強烈ナル風壓ヲ舷側ニ受クルニ於テハ「ワイ
ヤー」ノ伸張ニヨリ防舷物ノ浚去セラルル場合ニ
ハ岸壁ニ觸接スル危険ノ生スルコトナシトセサ
ルカ故ニ艦長カ此ノ點ヲ顧慮シ觸壁防止ニ從事
シタルハ其ノ當ヲ得タルモノニシテ是カ為觸
壁ノ災ヲ免レタルモノト認ムルモ艦ノ損傷ノ
結果ヨリ考フルトキハ其ノ損傷ハ主トシテ
岸壁ト艦ノ間ニ介在シタル防衝筏ノ衝撃力ニ
依リテ生シタルモノナレハ艦長ニシテ工廠供用
ノ防衝筏ノ構造ト艦ノ外板ノ強度トノ關係ニ

海 軍

0019

思及シ筏ノ為ニ損傷ヲ生スルノ虞ナキヤシ願慮シ
直ニ之ヲ調査スレハ其ノ損害ノ状況ヲ詳ラカニ
シ筏ニ代用スルニ集束セル釣床ヲ使用スルノ
方法モ講シ得ヘク又其ノ作業ニハ甚ラサル困
難ノ伴ヒタルナラハモ港務部ノ援助ヲ得テ繫
留索ヲ張ルノ手段ヲ執リ得ヘク免ニ角少クトモ
損害ノ程度ヲ減少シ得ル方法ヲ案出シテ之ヲ
實行シ得タランニ事茲ニ出テス艦ノ觸壁防止
ニハ成效シ得タリト雖當夜ノ如キ荒天ニ際シテ
ハ艦體トノ關係上防衝用トシテ信賴スヘカラサ
ルエ廠供用ノ筏ヲ信賴シ過キ却テ之カ為ニ損
傷ヲ招クニ至リタルハ寔ニ遺憾トスル所ナリ

第三 責任

0020


本件損傷ハ夜間殊ニ深更ニ於テ急激ニ起リタル
強風ニ基キタルモノニシテ多少ノ損傷ハ免レ
サルヘク從テ損傷ノ全責任ヲ艦長ニ歸セシムル
ヲ得スト雖前ニ損傷ノ原因ニ就テ述ヘタルカ如
ク周到ナル注意ヲ以テスレハ少クトモ艦體ノ
損傷ヲ減少シ得タルコトノ認メラルル以上縱
令觸壁防止ニ専心從事シタルカ為他ヲ顧ル違
十カリニ同情スヘキ點アリト雖畢竟海軍
懲罰令第九條第十號ニ所謂艦體ヲ毀損
セシメタル責任ヲ免ルルコト能ハサルモノ
ト認ム

右查定ス

大正八年五月十四日


0021

軍艦最上損傷事件査問會

委員長海軍大佐 森本義寛 

委員海軍大佐 牟田勉太郎 

委員海軍大佐 平岩元雄 

委員海軍大佐 上田吉次 

委員主理 漆川源之丞 

大正八年五月十四日

佐世保海軍工廠長 木村 剛

佐世保鎮守府司令長官代理

海軍中將 木村 剛 殿

軍艦最上損害程度并復舊工事ノ件

本件ニ付取調候處水準線ニ於テ前部肋材第六十二番ヨリ後部肋材第四百十二番ニ至ル一枚通り甚敷處ハ約二時四分ノ一ノ凹部ヲ一帯ニ生シ肋材ノ所々ニ龜裂アリ石炭庫ノ「ステール」ハ殆ト全部龜屈曲シ隔壁拾箇所ノ損傷アリ「クック」ノ切斷セルモノ等打換ヲ要スルモノ約貳千本多少ノ漏水アルヲ以テ入渠ノ上肋材六十七番ヨリ百二十一番迄外板七枚ヲ取外シ不正ヲ直シ肋材ノ屈曲程度些少ナルモノハ現場ニ於テ原形ニ復セシメ然ラサルモノ拾壹本ハ上下ニ於テ適宜切斷新規取替へ隔壁損害ノ部分ニ於テハ鋼板ハ切替へ山形材

海軍

0024

ハ復舊工事ヲ施セリ其損害費及工事日數左ノ如シ

工費 千六百圓

材料費 八百五拾圓

計 貳千四百五拾圓

附屬費 六百拾貳圓五拾錢

總計 參千六拾貳圓五拾錢

但シ入渠費ハ含マス

右報告ス

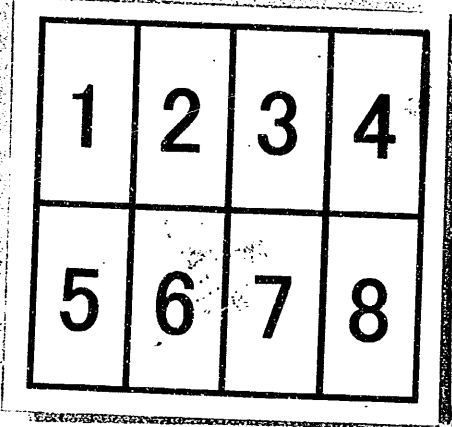
(圖面一葉添)

(終)

海軍

0025

分割撮影ターゲット

分割した 部分の 撮影順序	
分割撮影 した理由	A 3 版 以 上 の た め
上記のとおり分割撮影した事を証明する。	

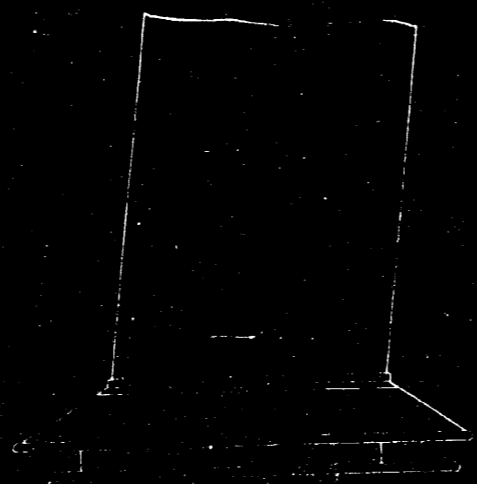
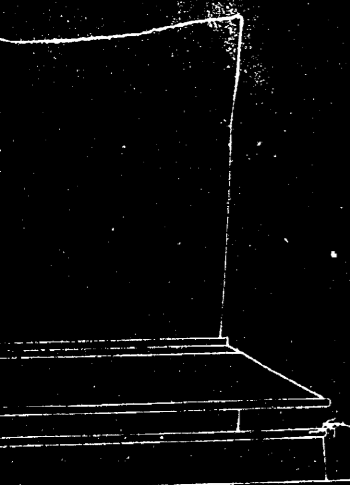
0026
0027
0028
0029
0030
0031
0032
0033

上甲板

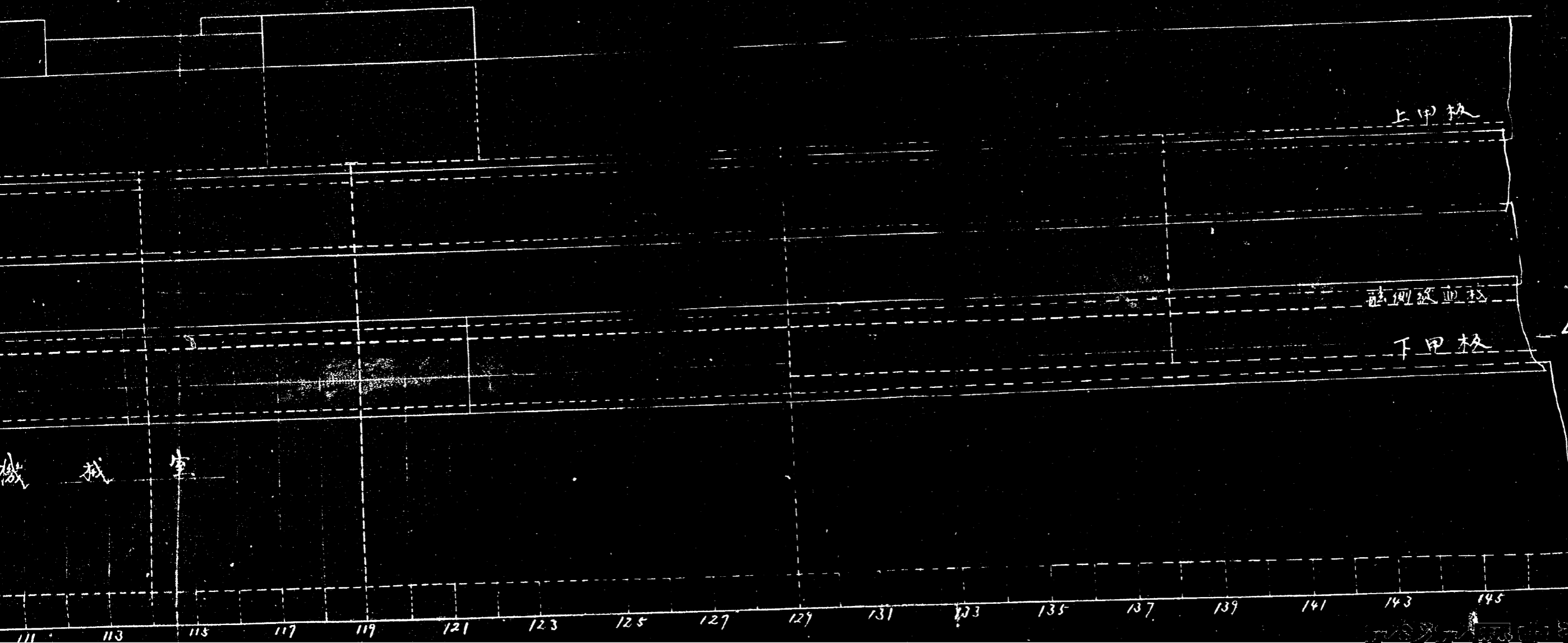
舷側縦通板
LWL

側

側面



汽罐室 ← 機械室



鐵 〇三

軍艦最上

破損箇所見取圖

注意

尺度

側面四寸一吋一六
切斷ニ分ク一尺トス

L.W.L

上甲板

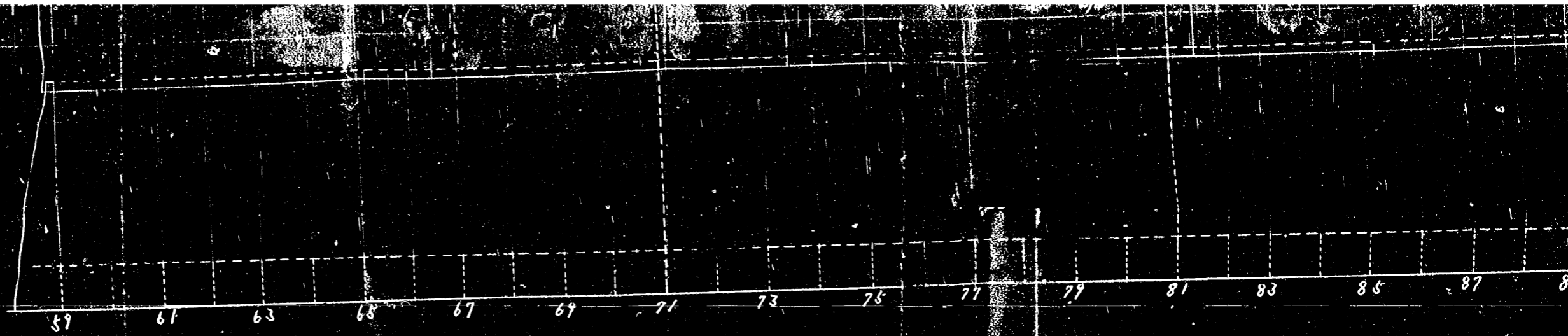
舷側舷柱

下甲板

佐世保海軍工廠造船部				
部長				
副部長				
技師				
製圖				
検査				
事務				
出庫				
83				

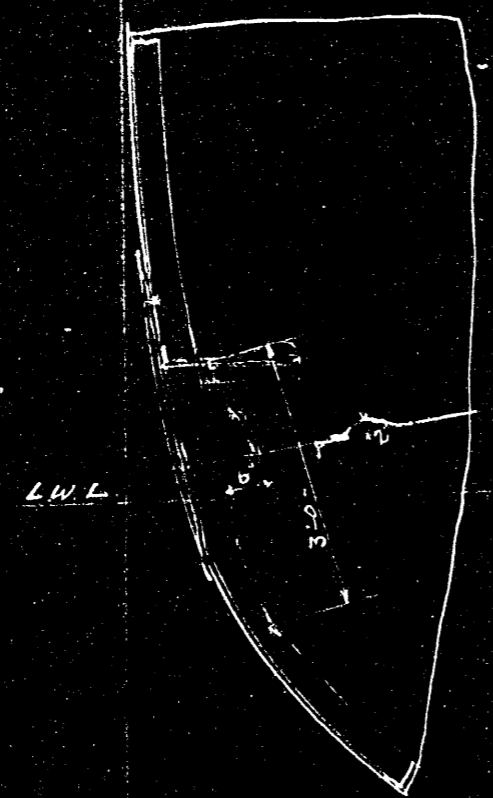
137 139 141 143 145

LWL



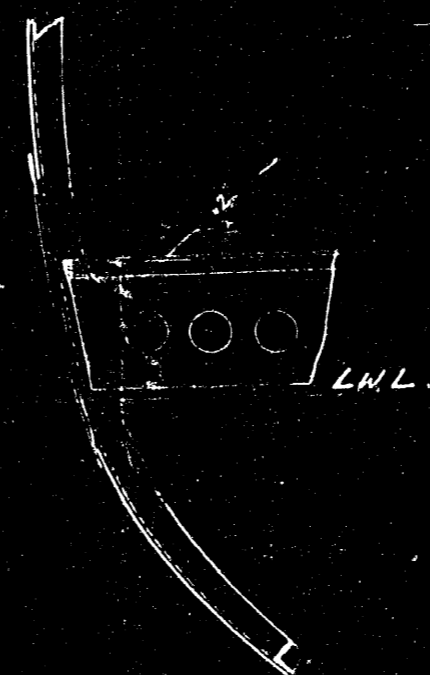
肋数 114 番 隔壁 切断

後面
給水庫



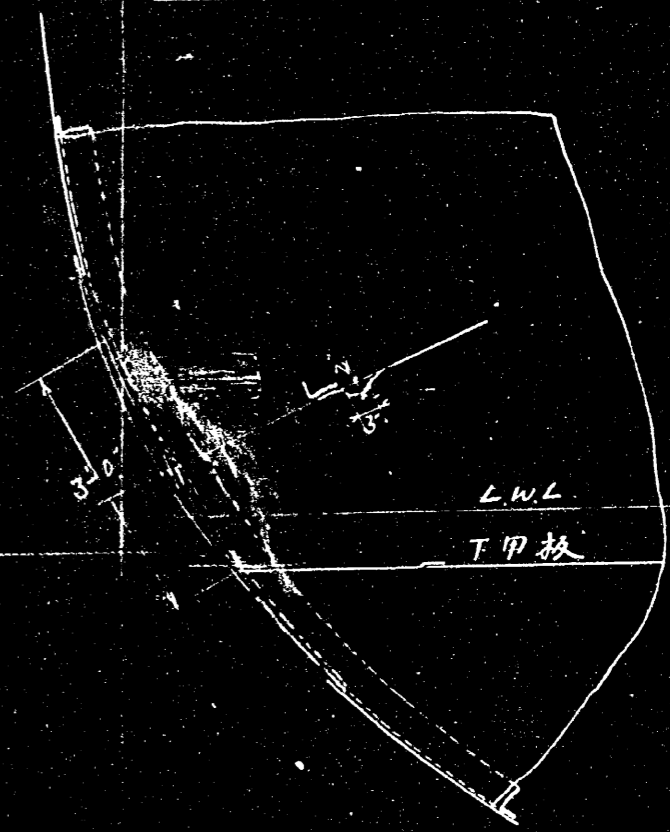
肋数 110, 113, 115, 118 番 切断

後面
給水庫



肋数 129, 119, 109 番 隔壁 切断

後面
給水庫



汽 罐 室 一 概 概 率

81 83 85 87 89 91 93 95 97 99 101 103 105 107 109 111 113 115 117 119 121

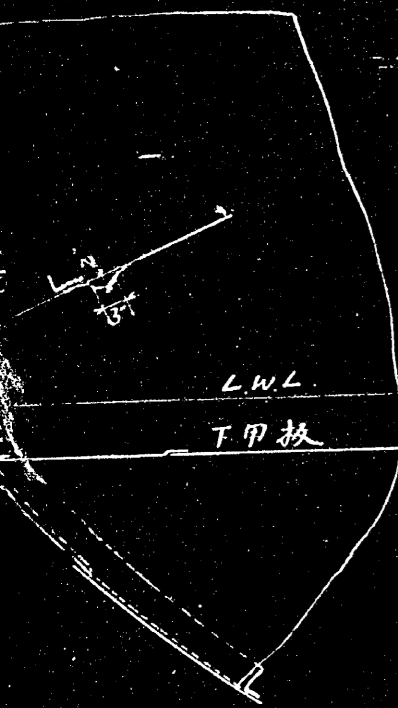
肋板 890.81.71 番 隔壁 切断

後 面
石 炭 庫



番 隔壁 切断

後 面
水 庫



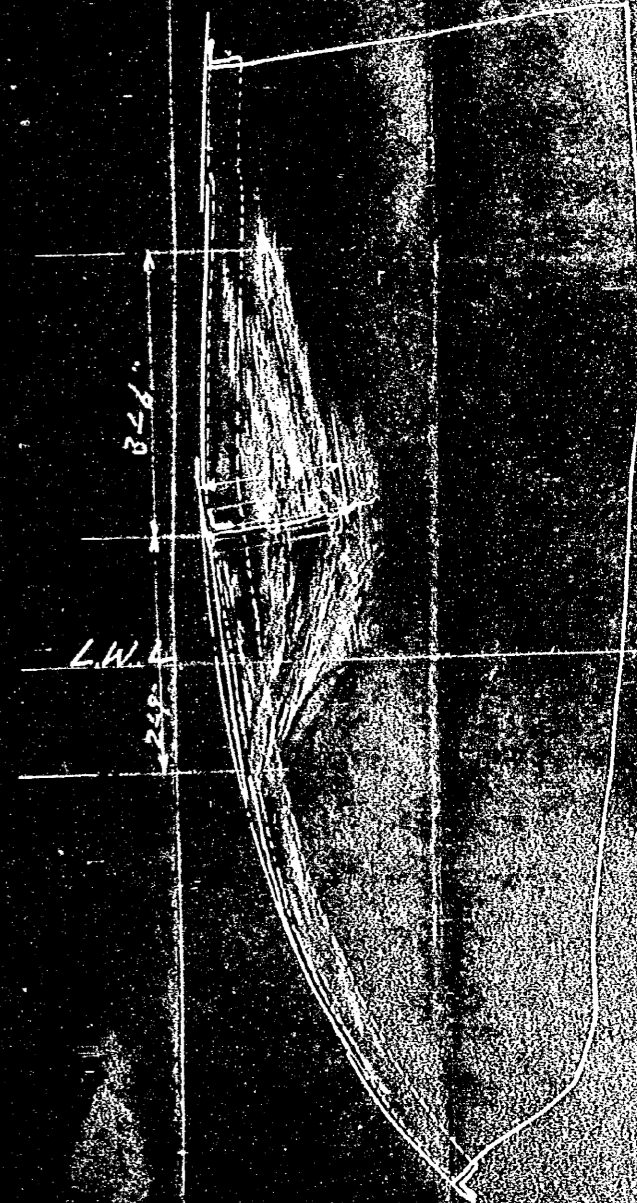
肋板 83.85 番 切断

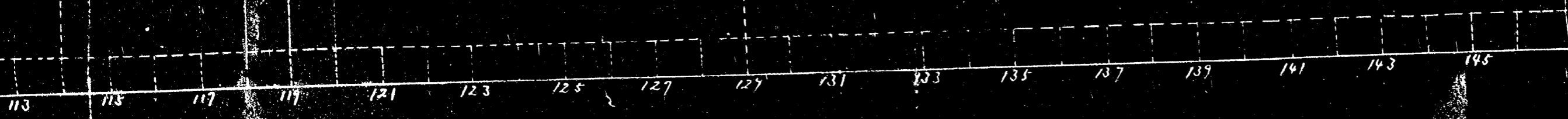
後 面
石 炭 庫



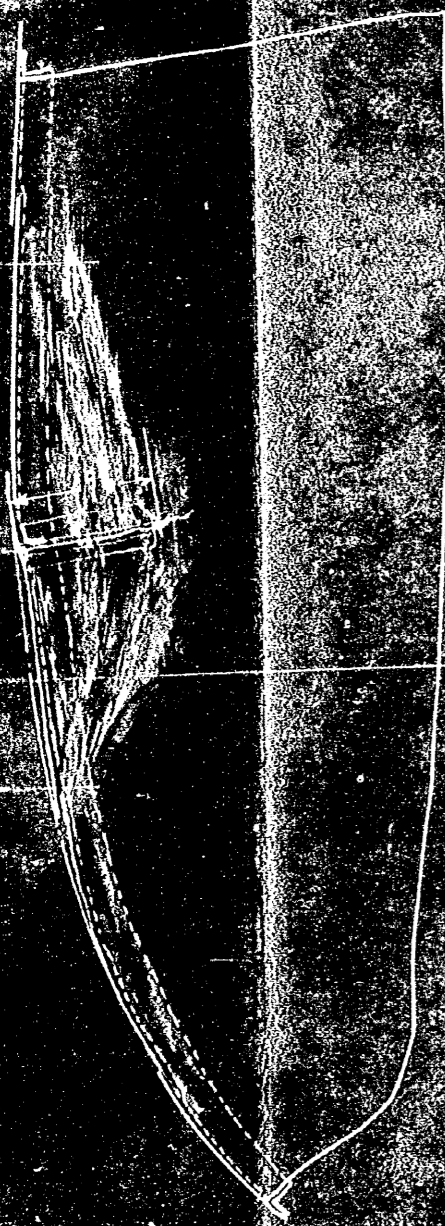
肋板 99 番 隔壁 切断

後 面
石 炭 庫

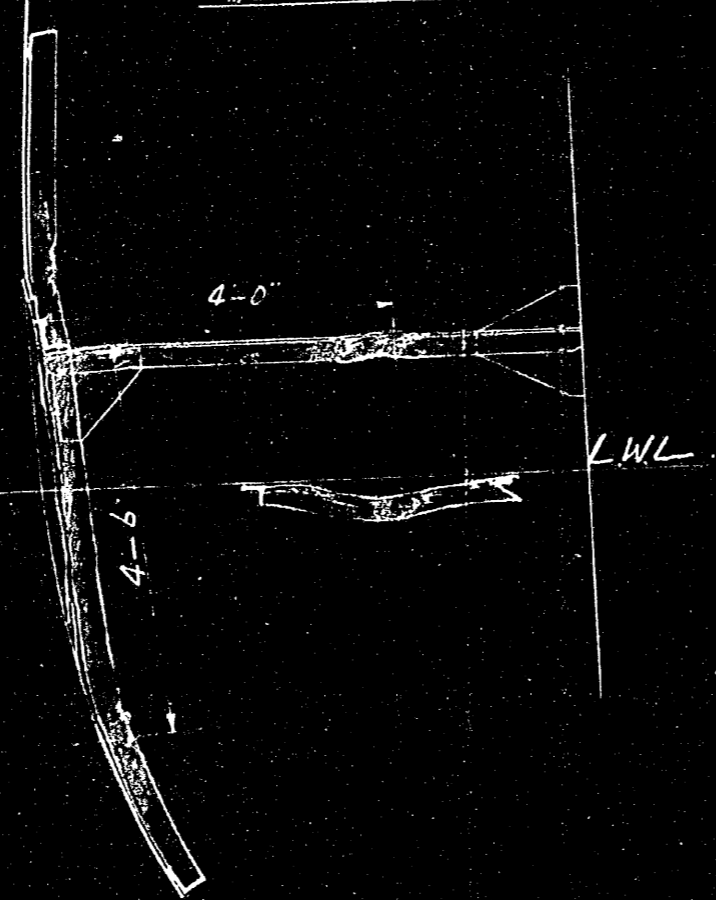


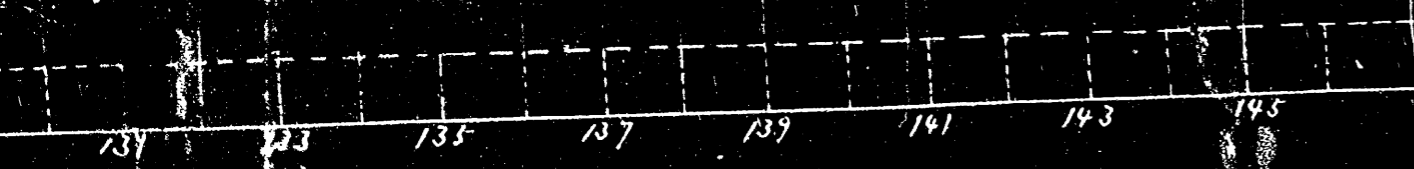


加茂方99番隔壁切斷
石炭庫後面

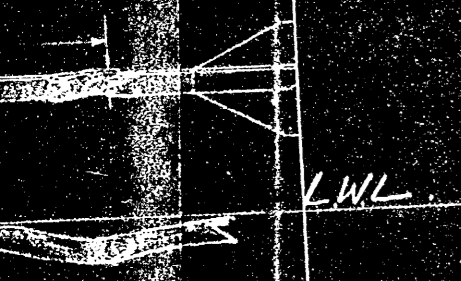


加茂方101.103番切斷
船水庫後面





103番切新
 水庫



四多一母一吹上六
 二多一母一吹上六

長	島	製	高	手
中	島	製	高	手
高	原	製	高	手
全	上	製	高	手
83				
8-6-27				

日 始 参 月 四 点 八 止 入
 事 記
 中 島 製 高 手
 高 原 製 高 手
 全 上 製 高 手

査問調書

最上艦長 海軍中佐 豊島 二郎

四月二十日
夜艦の保安上施サレタル要置如何

答 自分ハ当夜九時ニ歸艦ニ于一時消燈ト同時ニ就

寝シタルカ風強カリト見ヘハツトノ響ニテ目覚

メタルニ一時時鐘ヲ聞キタリ仍テ直ニ起床ニ巡視ニ

テ後甲板ニ至リタルニハツトニハ異状ナカリシモ

艦ノ方カ岸壁ニ接近ニ居タルヲ以テ右舷ノ艦ノ

イヤリヲ張り込ムカ直シカラニト考ヘ其ノ旨ヲ港務

部ニ通知スルノ必要ヲ認メ直ニ衛兵伍長ニ命

ジテ同部ニ電話通知ヲ為セリ然ルニ同人ハ引

0034

キ返り来リテ非常ニ岸壁ニ接近シ居ルト言
 ヒヨリ先任將校ニ總員起床ヲ命ジ夫レヨリ
 後部ニ使用セシ工廠供用筏ノ繫番索切断シ
 前方ニ移動セリ再ニ後方ニ定繫スルノ手段
 ヲ執リ一方舟艦備付ノ作製防衛具三個ヲ岸
 壁ヨリ吊シおれトクハトシテ内側ニ向テ棧橋ヲ
 取除キ觸壁防止ニ努メタリ
 防衛筏ノ船体ニ及ス影響ニハ考ヘヲ及オササ
 リ
 衝撃甚シキヲ以テ筏ノ所ニ幾分カ凹ミナラシ
 大シムコトハナキモノト思惟シタリ

0035

問 甚、當時船体ノ損害程度ニ就テハ特ニ調査ヲ為ササリニヤ

答 損害ニ就テハ顧慮シタルモ機関部ヨリハ大ニタルコトナシトノ報告アリ高方ニテアリシ程ノコトハナクモノト考ヘ損害程度ニ就テノ調査ハ為ササリニナリ

問 及對側ヨリ執リタル繫雷索ヲ張り込ム考ヘハ起ラサリニヤ又其ノ處置ハ執ラサリニヤ

答 其ノ手段ハ講セサリシ艦員ノ手ニテ張り込ムコトハ到底不可能ト思惟シタルハナリ

問 当夜在艦セシ人員ハ幾何ナリニヤ

0036

答 九十名許り在艦セリ

問 他ニ援助ヲ乞ハサリシヤ

答 最初港務部ニ警備索カ引ケタカ切レタカ何レカノ

為岸壁ニ接近シツ、アム旨電話ニテ通知セリ

尚其後、フエシカールヲ持テ来ルヤウ一等兵曹*

ヲシテ電話セシメタルコトアリ他ニ援助ヲ求メ

タルコトナレ

問 防衛隊ハ暴風雨ノ際ニモ有效ニシテ信頼スヘキモノ

ト考ヘ居ラレシヤ

答 左程ニ信用セザルモ従来ノ経験ニ鑑ミドシク、

テハ鬼ノ角シク、打テハ大丈夫ト思ヒ居タリ

問

当時艦員ノ年々之依リ反對例ヨリ索アリ
込レコトハ不可能ナリト断定スルハ精算計

ナリト思ハんカ如何

答

当時ノ状態ニ於テ其ノ年々ノ艘ヲ執ラレカ
ヤ

ヤ一ヲ取リ飛ハシ船体ヲ岸壁ニ衝突セ

セシムルノ慮アリコト以テ其ノ方法ヲ講スル

ニ至ラサリ也

問

スルニ一カ岸壁ニ當ルニトシテハ懸念セサリヤ

答

角度ノ推測ヨリシテ何等支障ナレト考ヘ居

ナリ

問

幾カ所方ニ空クナリシ目撃シタル際其旨ハ

0039

答
ワイヤールカ切シタニモト思惟セウレシヤ
ヒゲタカ切シタカト思ヒタリ

右録取ス

大正八年五月五日

於佐世係録守府

軍艦取上指傷事件査問會

委員長 海軍大佐 森本 義寛

0040

査問調書

海軍上等兵曹 宮本英三郎

問 四月二十三日、秋津軍艦最上損傷當時貴官ハ在場

當將校トシテ勤務ニ居ラシシヤ

答 然リ

當夜天候ハ何時頃ヨリ陰悪トナリタルヤ

答 自分ハ正子ヨリ翌朝ハ時迄ノ當直ナリシカ正子

ノ交代時ニハ少シク風吹キ居リシヨリ艦内ヲ

巡視シタルモ大ニタルコトナキヨリ其ノ程度ナラハ

大丈夫ト思考シ唯士室^官ニ到リテ當直始メノ後

休憩シタリ其ノ後強風トナリシハ一時十五分

0041

頃ナリヤ

問 総員起床、命令ハ何時アリシヤ

答 矢張り一時十五分頃ニシテ先任将校ヨリ其ノ

命令アリタリ其ノ時ハ艦長モ甲板ニ居ラレ

タリ

問 天候陰惠ニ對シテ執リシ處置ハ如何

答 岸壁ト艦ノ間ハ防舷物カ毀ハルノ様ノ事アリ

テハ艦カ岸壁ニ當ル虞アリタリヨリ此ノ本艦備

付、作製防衝具ヲ岸壁ニ吊シ、オートクビツト

リ内側ニ向テ棧橋ヲ取り除クニ等総員起床後

ハ自分ハ艦長先任将校ノ命ニ従ヒ兵員ノ作業

0042

監督之責ヲ任シ居タリ

13) 作製防衛号ノ大キサハ如何

答 長サ一米強直径一呎位ノモノ三個ヲ使用セリ

尚其ノ外ニハレモツク五個位括リ合セ用意

セシモ使用セス

14) 岸壁ニ吊シタル作製防衛号ニ船体ハ當リ

居リシヤ

答 當リ居ラス然レモ當リシヤウ後ニテ見受

ケタリ

15) 船体ニ幾ノ割衝ニヨリ船体ニ損害ヲ及ボス

考ヘハ起リサリシヤ

0043

冬

向分の山岸壁之高クテルコトナキヤト深ク懸念
ニ致スル膏クテ船体ハ大丈夫ト思ヒタリ

問

反對側ヨリ取りアリシ繋留索ヲ張り込ケ考ヘ
ハ起ラサリヤ

冬

繋留スル際沖ヨリ取りアリシ索ハ五時半ノワキ
ヤシニテラフテケルヲ掛ケテ張り合ハシメ

スノナリ故ニ艦ノ兵員ニテハ到底張り込ケトハ

出来得サルモノト思惟シタリ

問

當時在艦セシ人員ハ幾何ナリヤ
百名許ナト思フ

問

電燈ハ何時點シタルヤ

答 最初之常備燈ヲ使用シタリシカ作業ノ中央

ニ至リテ電燈點シタリ作業燈ハ舷門附近

ニ大ナルノヲ點セリ

問 筏ハ幾何使用セシヤ

答 二個カ三個カト思フ位置ハ舷門ヨリ後方ニ

一個ハ前方ニ一個中央ニ一個ナリト思フ其

レハ岸壁ノ上面ニケールルヲ張リテリヨリ

ツレニワイヤーヲ以テ取止メタリ仍リテ

移動スルカ如キエトナント思ヒ居タリ

問 其ノ筏ハ移動ニ居ラサリシヤ

答 自今カ見廻リニ際ハ適當ノ位置ニ在リテ特

勅ヲ認メス併シ其ノ後ノコトハ知ラス

同 総員起来前何回位見廻リタルヤ

答 二三回見廻リタルモ其ノ都度箴ハ適當ノ位

置ニ在ルヲ確メタリ

同 箴カ押ニ出サレタルヲ感ニ其レヲ引キ入ル

手箴ヲ施ササリシヤ

答 自分ノ艦内作業ノ監督ニ当リ居リシヲ以テ

其レ等ノ手箴ヲ講セシシヤ否ヤ不明ナリ

同 常帆長ノ職務ヲ執リシ者ハ居ラサリシヤ

答 在艦セシヤ否ヤ確ナラス

同 作業時間ハ如何

海軍

谷 一時十五分ニ始メ一時二十分ニ終リセリ

右録取ス

大正八年五月五日

於此世保録守府

軍艦最上損傷事件査問會

要員長 海軍大佐 森 本 義 寛

0047

査問調書

休世保海軍港務部

海軍兵曹長 坂本寅太郎

問 貴官の軍艦最上級留作業ノ主任ナリシヤ

答 然リ

問 當時繋留索ハ如何ナル程度ニ張りタルヤ

答 最初、チェーン掛ケ六十馬力、小蒸汽ヲ使

用シテ十分ニ張りタリ之次上ハ如何ナル方法ヲ

以テ之ヲ五張ルコトノ出来サシ程度ニ張りツメ

置ケリ

問 満潮時ニ艦ハ山岸壁ヨリ幾何ノ距離ヲ保ツヤウ

二十の置キタルヤ

答 岸壁ト艦トノ間ニ筏ニ個丈並列ニ得ル様ニ

為セリ然レ間隔ハ從來ノ経験上適當ト認メ

タル次第ナリ輕留後満潮時ニ現場ヲ見廻

リタルニ輕留當時ノ狀作ト異リ居ラス

問 是レ何時ニ筏ニ個丈並列ニ得ル様ニ為レ

居リタルヤ

答 何時モ左様ニ為レ居タリ陸地ヨリ艦ニ加ホ

橋ノ必要上ツレ以上ノ距離ヲ存スルニトハ顧慮

ヲ要スルニモト思惟ス

問 四月二十三日午前一時三十分ノ満潮時ニ於テ航

0049

作カ岸壁ニ觸シ飛ビニノ寸カ然ノ場合ニ緊急面

素ヲ張り込リユトハ可能ナリト思惟スルヤ

答 テーラムニシ掛ケテドレノ張レハ優ニ張り込ニ得

ルニト思フ

問 當時九十名位ノ兵員ニテ張り込ニ得ト思フヤ

答 岡ノ方ノ素ヲ少シクシテ、池メ「テーラム」ニシ掛ケテ張

レハ五十名位ノ兵員ニテ十分ニ為シ得ルコト

ト思惟ス

問 銃鏡ニ使用シタル「ケーファン」ハ如何ヤウナルヤ

ナシヤ

答 直径ニ寸半長サ一節ノ長ノナリヤ

0050

海軍

内 貴官何時港務部勤務トナラレシヤ

今 昨年十月港務部勤務トナレシ

右 録取ス

大正八年五月六日

於此世係録守存

軍艦最上招借事件査問会

委員長 海軍大臣 森本義寛

0051

査問調書

佐世保海軍港務部

海軍上等兵曹 武田 伴平

同 貴官は四月二十二日の当直中

同 御

同 当夜一時頃工廠敷船場へ警備中ノ軍艦

同 最上ヨリ何か電話ヲ受ケタルコトアリヤ

各 艦ノフエシカノナクナリ艦カ岸壁ニ當ル故相

同 當ノ處置ヲ頼イトノ電話アリシヲ以テ夫々

同 準備ヲ為シ一時十五分頃現場ニ到リタル

同 二ツ上ニ外レハ元ノ通ニ取付ケアリシヨリ其ノ

0052

際、つとふし、撃ち留る素、艦ト岸壁トノ距
離等調査とふし、異状ヲ認めス而モ撃ち留
素ハ十分ニ張り居リこり何等手ヲ下スノ
餘地ナカリキ

如何ニ準備ヲ為とふヤ

テ、いふ用意とて、成程ヲ廻ハシ隊ヲ撃ち留
際ト同一ノ準備ヲ為シ現場ニ到リタリ

現場ニ到リタリ際最上ノ士官ニ會ハサリしヤ

當在特校ニ面會シ求メタリト上等兵艦カ

當在特校トシテ出テ来るニ防舷物ハ今取付

ケタト云ハシタリ

同 成船の如何なるノヲ持テ行キ申ヤ

各 三脚成船八十三噸ニシテ小形ノ成船アリ一番

強カノモノナリキ

同 テーブルの何時ノモノナリキ

各 四時ノ物ナリ

同 舟吏の何名連レ行キ申ヤ

各 六名ナリキ

右 録取ス

大正八年五月六日

松佐世保鑑守存

軍艦最上損傷事件査問書

0054

第 九 十 一 号

法務局長

○

局長

○

海

軍

軍務局長

○

局長

○

局長

○

大正七年七月十七日

了たて

左 録 免 録 免

新 吉 一 牛

Handwritten cursive text (kuzushiji) filling the main body of the document. The text is dense and difficult to transcribe fully without specialized expertise in Japanese calligraphy. It appears to be a formal record or certificate.

(Circular stamp or signature)

(塚田 納)

0056

軍務 第三五二號

法務局

大正八年七月四日

二〇七

第一課 陸軍省軍務局長 井出輝治 殿
海軍省軍務局長 井出輝治 殿

軍艦海上撲傷事件 査問終結ノ件

本件ニ関シ本年六月十七日付軍務局長第三
五二號及び御照會ノ趣リ兼別紙査定書
正奉相添付件報告書宛更ニ抄出及
小為査収有奉

右回考云

0057

進平中件査向一併記録（院長報告書、揚着
 程度延慶四二書報告書及因面査向調査
 等を括り一併年六月二日報告書為迄後
 書次整理除見當りサリトテ付屬未披
 素中以外（トニ）條り御回考り通也
 實見ルル所而所敢為子願り抄寫程
 延慶の五書報告及因面ラ當該査向會
 記録ヲ査向調査ノ各年檢ニテ更ニ作
 製セシメテ考考ニテ添付致ル條阿平
 君ノ御了集あるに應長報告書ニ大抵
 査定書事等ノ部ニ記載ノ事等ト符居

0058

海軍

致序りて是の付書亦次第知事年五ヶ
庶堂書乙本証得付考考書以人内
(用) 清ノ上御辺屋よ成る外

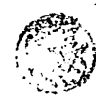
(丸)

0059

法務局



局員



海軍

軍務局長

第一部長



大正二年六月廿七日

海軍局長

Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a memorandum or official document. The text is dense and difficult to read due to the cursive style.

(海軍局長)

(印)

第三五二號

(坂田納)

0900

